



瀬田の丘

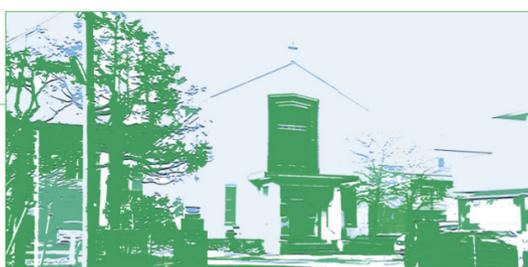
創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部

東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）

日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



四旬節についての疑問にお答えします

主任司祭 小西 広志 神父

質問1：なぜ、「四旬節」と言うのですか？ 四旬節はどんな風に特別なのでしょうか？

四旬節とは復活祭前の四十六日間を指します。これはラテン語の四十に由来するクアドラジェジマ(Quadragesima)に基づくものです。四旬とは四十を意味し、その期間の日曜日も含めて数え、四旬節は四十六日間となります。かつては五旬節の主日、六旬節の主日、七旬節の主日というものが存在しました。それは四旬節が始まる灰の水曜日の直前の主日を五旬節の主日と呼び、その前の週を六旬節の主日、さらにその前の週を七旬節の主日と呼びました。

現在の典礼暦では四旬節は、具体的には灰の水曜日から復活祭の前日(聖土曜日)までの期間です。この期間、主イエス・キリストのご受難と死を黙想し、典礼的に追体験していきます。

質問2：「灰の水曜日」がイマイチわかりません。灰の意味、なぜ水曜日なのですか？

四旬節の始まりが「灰の水曜日」となります。前述の回答に記したように、四旬節の始まりである「灰の水曜日」を極端に強調する傾向がかつての教会の典礼の中にはありました。それで四旬節が近づいているのを意識させるために、五旬節、六旬節、七旬節の主日といったものが存在したのだと考えられます。

「灰の水曜日」では、ミサの中で灰を頭にかぶる灰の式が行われます。聖書の世界では灰は悔い改めのシンボルであり、また空しさのシンボルでもあります。四世紀ごろから教会では四旬節の始まりに灰をかぶる式を行っていたようです。そして十一世紀には正式に教会の典礼の中に加えられていきました。

主のご受難とご死去を黙想する四旬節にあたり、まず、自分自身の悔み、いたらなさを認めるために灰を典礼的にかぶるのは特に勧められる所作だと思えます。しかし、これはエウカリスチア祭儀(ミサ)と切り離されたところでなされてはならないと思えます。ですので、水曜日のミサの中で灰の式が行われるのが本来の姿です。灰の水曜日に灰をいただかなかったからといって、翌週の日曜日(四旬節第一主日)に灰の式を行うのはあまりふさわしいとはいえません。司教団も灰の水曜日のみにおこなうようにと指示しています。

質問3：「大齋・小齋」って何ですか？ 何のためにあるのですか？ 守らないとダメですか？

日本語で「齋」とは「もの忌み」の意味があります。これはある期間、ある種の日常の行為を控えて穢れを避けることです。どの信仰でも宗教でも禁忌(避けること)が存在します。神さまへと向かうために、心身の清めを求めてのことです。キリスト教では主イエス・キリストのご受難とご死去にならうために、あるいはあずかるために、あえて食べ物を控え、愛のわざに励むのが大齋・小齋の本来の意味です。

かつては厳しい規定がありましたが、現在ではよりシンプルで本質的な規定へと変わりました。大齋は食事の量の制限です。つまり四旬節中の灰の水曜日と聖金曜日に行います。一日に一回、十分な食事を摂り、あとの食事は極力少ない量に抑えます。小齋は摂取できる食品の制限です。灰の水曜日と聖金曜日に大齋と組み合わせ、お肉の摂取を控えます。また、日本の司教団はそれ以外に四旬節を含めた年間の金曜日に各自の判断でお肉の摂取を控えるようにと勧めています。一九六六年の典礼改革以前は獣の肉、卵、乳製品を金曜日に避けるように決められていました。当時は年齢も七歳以上のすべての信徒が対象で、金曜日の他にも主日の前日や聖人の祝祭日の前日には大齋と小齋が組み合わされて行われていました。現在では年齢は一四歳以上を対象にしています。小齋を行う代わりに愛徳のわざ、信心業、節制のわざなどの実行も勧められています。

大齋・小齋はいずれも病人や妊娠中の者、満六五歳以上の者、特別の事情がある者は免除されるということになっていますが、これは、病気の方々、妊娠中の方々、高齢者の方々、危険な労働に従事する方々のご自分の存在と在り方を通して、主イエス・キリストのご受難と特別に結び合っている方々だと教会が理解するから、大齋・小齋は免除されているのです。大齋・小齋を守るべきか、否かだけで理解するとしたら、それはあまりにも稚拙な理解だと言わざるを得ないです。

質問4：聖週間について教えてください。

神の国の訪れを、ことごとく行動をもって現されたイエス・キリストは、受難と死を通して復活の栄光へ移られました。これを「主の過越」と言います。そして、旧約の「過越祭」に代わって、新約の民であるキリスト者にとっては、「主の過越」を記念する祭りが年に一度、最も盛大に祝われる祭りになりました。これが復活祭(主の復活の主日)です。この祭りは本来、受難・死・復活という主の過越の出来事全体を記念するものです。当初は、復活の主日とその前日の典礼で行われていたようですが、やがて四世紀の後半からは、できるだけ出来事の経過に忠実に祝おうということから、まず「主の過越の聖なる三日間」が重要なものになり、やがて復活の主日の前の主日(受難の主日)からの一週間全体が「聖週間」として大切にされるようになりました。

聖週間の典礼は、四世紀末のエルサレムで特に盛大に行われていました。当時、聖地エルサレムへ巡礼したこのあるエテリア(スペインの女性)の巡礼記によると、エルサレムに住むキリスト者は、既に復活祭の一週間前に、枝の主日の起源となった「主のエルサレム入城」の出来事(マタイ 21・1-11)を追憶する祭儀を行っていたことが分かります。この枝の主日から始まる一連の記念祭儀の中心になっていたのは、イエスが最後の晩餐を行い、苦しみを受け、死んで、復活された経緯に従って、該当する曜日に同じ場所に赴き、その時の出来事を記した聖書の箇所を朗読しながら、主が死から復活の命に過ぎ越されたことを、三日間かけて祝うことでした。エルサレムで行われていたこのような一連の記念祭儀がモデルとなって、次第に、各地の教会にも、聖週間の典礼が広まっています。こうして復活祭に先立つ一週間が「聖週間」と呼ばれ、その中でも、「主の晩餐の夕べのミサ」から、「主の受難」の祭儀を経て、「復活徹夜祭」を頂点とし、「復活の主日」に至る三日間が、「主の過越の聖なる三日間」と呼ばれるようになりました。

この新しい過越が、ユダヤ人の過越祭(安息日で土曜日)を包み込むかのような日取りで行われたことは、ユダヤ人の過越祭の小羊に代わって、イエスさまが「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ 1・29)となり、私たちのために復活の命をもたらしてくださったことを暗示しているかのようです。

ところで、「聖なる三日間」とは、「三日目に復活し」(使徒信條)といわれるときと同じように、実は、日没が一日の境目であるという当時のユダヤ暦の考えがもとになって、次のような数え方をします。

・第一日(ユダヤ暦の週の第六日)

水曜日の日没から金曜日の日没まで。すなわち、最後の晩さんからイエスの死、そして墓に葬られるまで。典礼上は、聖木曜日「主の晩さんの夕べのミサ」から、正式には午後三時ころ行われる聖金曜日「主の受難」の祭儀まで。

・第二日(ユダヤ暦の安息日)

金曜日の日没から土曜日の日没まで。主の墓にとどまって、主の受難と死を思うという意味で、祭壇の飾りを取り除き、ミサもささげません。

・第三日(ユダヤ暦の週の初めの日)

土曜日の日没から日曜日の日没まで。教会はこの夜を復活徹夜祭で盛大に祝い、翌朝、復活の主日のミサを行い、そして復活の主日の晩の祈りで締めくくります。

質問5：では、いったいどのように四旬節を過ごしたらよいのでしょうか？

四旬節は愛と節制の時です。身近なところで愛のわざを行い、心と体の節制に努めることが勧められます。こうして、わたしたちへの愛のために十字架上で亡くなられたイエスのお心と一つになることができるでしょう。

しかし、現実にはわたしたちの生活は忙しく、しかも人によっては病気などの困難と共に生きておられる方もおられます。ですので、極端な愛のわざ、節制をするのは難しいと思えます。ただ、新型コロナウイルス感染症のことで世界全体が苦しんでいますから、そのことで祈りをささげたり、思いを巡らしたりすることは勧められると思えます。このような時だからこそ、各人各様の四旬節の過ごし方が求められるのです。わたしは、今年の四旬節の間はイエスの十字架の上の七つの言葉を思い巡らしたいと願っています。

①「父よ、彼らをおゆるしくください。自分が何をしているのかわからないのです」

②「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」

③「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です。……見なさい。あなたの母です」

④「渇く」

⑤「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

⑥「成し遂げられた」

⑦「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」

これらの言葉からインスピレーションをいただいた黙想のカードを四旬節の間、毎週、聖堂の入口に用意

しますのでお持ち帰りください。

恵みに満ちた四旬節をお過ごしください。